

薬学会会員の最初の国務大臣

薬学雑誌 1897 年度(明治 30 年) p 1227

「薬学会会員で最初に国務大臣になったのは誰か？」
「えっ、国会議員ならいそただけど、国務大臣なんて出たの？」

今、国務大臣は、たいてい国会議員の中で当選回数が多い人から選ばれる。庶民的ではないと批判はあっても、やはり庶民であろう。

ところが昔の大臣は歴史に名を残すような人たちだった。維新成って国務大臣に相当する職を担ったのは、幕府を倒した西軍の有力者たち数人である。「わしは外交を担当しよう。おぬしは内政を頼む。財務はやつに任せたらどうじゃ」などと決まったのではなかろうか。

内閣制度ができて国が固まっても、例えば明治 29～31 年まで続いた第二次松方内閣の布陣は、外務大隈、内務樺山、大蔵松方(兼)、陸軍高島、海軍西郷、司法清浦、文部蜂須賀、農商務榎本、通信野村といったメンバーで、伊藤、山縣、西園寺、黒田、大山、板垣らはこの背後にいて、彼らも前後に大臣になっている。

徳島藩最後の藩主だった蜂須賀茂韶のあとを次いで、明治

30 年 11 月文部大臣になったのは、^{はま おあらた}濱尾新。異色である。維新の豪傑、元勳ではなく、初めての学士会会員の国務大臣であった。1849 年生まれ、慶応義塾、大学南校に学び、文部省、東大などに出仕。1893 年第 3 代帝大総長。現在東大の安田講堂と三四郎池の間、椅子に座った巨大な銅像がある。

さて 11 月 27 日、学士会は小石川植物園で濱尾大臣就任の祝宴を開いた。学士会は、博士学士等の帝国大学に関係ある学友より組織せられ、学者あり軍人あり官吏あり、その他国会議員、弁護士、実業家、医師、技師等、各般の高等なる職業に従事せる者を網羅する。全会員ほとんど三千人の多きに達し、最初の卒業生はようやく齢 50 近くになりつつあった。この祝賀会には、長井、丹波、田原、齋藤が出席している。

なぜこういう記事が薬誌にあるか？

濱尾は会員数 460 人の時代からずっと薬学会会員だったのである。学会での活動は不明だが、薬誌 1897 年度 p 207、1898 年度 p 208(会費領収広告)には、半年分の会費 1 円をきちんと払っている濱尾の名がある。

小林 力